

6年1組 わたしが作ったお弁当と一緒に訪ねる

朝日山観音堂

家庭科で取り組んだお弁当作り。1回目のお弁当づくりを終え、「せっかくお弁当を作るなら、遠足のような形でやってみたい」と子どもたちは願いました。それならと、朝から学校でお弁当を作り、学校を出発して目的地へ向かう、「遠足」を計画しました。その前日に書いたSくんのふりかえりです。



明日は、実際に家から空のお弁当箱を持ってきて、中身を自分たちで作って遠足に行きます。ドキドキします。親が朝そこまで早く起きなくても、ぼくの出発時間に間に合っているということは、たぶん作るペースがすごく速いのだと思います。ぼくたちも、親が作っているスピードと同じくらいの速さで作りたと思います。

Sくんには、遠足の朝、お弁当作りをしているお家の方の姿が思い浮かんでいたのでしょうか。その姿と自らを重ね、「自分もできるのかな」と挑戦が生まれていたのだと思います。

遠足の目的地は「朝日山観音堂」。受験を目前に控えた子どもたちにとっては、合格祈願をする場にもなりました。



わたしは、班でお弁当を作ったら、もっと友情が深まったと感じました。なぜなら、分担しておかずをつくったり、お皿を洗ったり、その時にある会話が友情を深めたと思うからです。さらに、一緒に作ったお弁当を食べることで、「このおかずは美味しい」、「このおかずは美味しくない」という会話が生まれます。そして、それを改善するにはどうしたらいいのか、分量を一緒に決めていくことで友情が深められると思いました。



Kさんの考えを知り、あの時間にはこんなことが起きていたのかと教えられました。完成したお弁当。しかし、その完成に至るまでに、Kさんのように友だちとの会話が何度も何度も行われていたのです。それは、「美味しいお弁当をつくろう」という、同じ目標に向かっていく会話だったと思います。そして、その会話からその人の好みを知ったり、思いを受け取ったりしていたKさんだから、「友情が深まった」と感じられたのでしょうか。



私がお弁当作りを通して学んだことは、相手への思いです。最初はただ作ってつめれば良いと思っていました。でも、作っていく中でお母さんがいつもどんな思いで作っているのかを考えるようになりました。いつも普通に食べているお弁当の中には、お母さんの思いがたくさん入っていると考えると、お弁当は相手への思いを込めたメッセージだと考えました。

「お弁当には、ただ料理を作ってつめれば良い」と思っていたYさんが、新たな気づきをしています。「お弁当は相手への思いを込めたメッセージ」。作りながらお母さんのことを思いめぐらしていくYさん。思い返せば、料理を作り終えると、班の友だちのお弁当にYさんがおかずを詰めていることがありました。その時が、「まさにお母さん」になっていた時だったのかなと。「こうやって詰めたら、きれいかな」「こう詰めたら、おかずが全部入るかな」「〇〇さんは、食べれる量ってこれくらいかな」と相手を考えるYさん。彼女が思いを詰めていたから、思いが詰まっていると気づいていったのでしょうか。